

手話学習ソフトで新しい授業づくり

高知県南国市立教育研究所 宮川 啓

キーワード：手話、学習ソフト、新しい授業、福祉、表現力、伝える力

1. 開発の背景

平成14年度より新学習指導要領に基づく教育課程が全面実施となり、「総合的な学習の時間」が新たに創設されることとなった。

私は、今回の改訂のキーワードを「共生」と「学びの転換」としてとらえている。

「共生」に関しては、新指導要領の総則 第6 指導の計画の作成等にあって配慮すべき事項(12)においても、「中学校間や小学校、高等学校、盲学校、聾学校、及び養護学校などとの間の連携や交流をはかると共に、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること」と記述されている。これは、様々な人々の中で共に生きる、つまり「共生」して生きていく力を身につけることが重要であることを示唆していると考えます。

次に「学びの転換」に関して、教育課程審議会答申の1 教育課程の基準の改善のねらいとして「自ら学び、自ら考える力を育成すること」が重要であるとし、「多くの知識を教え込むことになりがちであった教育の基調を転換し、幼児児童生徒の立場に立って、知的好奇心・探究心をもち、自ら学ぶ意欲と主体的に学ぶ力を身に付け、論理的に考え判断する力、自分の考えや思いを的確に表現する力、問題を発見し解決する能力を育成し、創造性の基礎を培い、社会の変化に主体的に対応し行動できるようにすることを重視した教育活動を積極的に展開する。また、知識と生活との結びつきを重視して、知識や技能等が総合的に働くようにするとともに、体験的な学習、問題解決的な学習、調べ方や学び方の育成を図る学習を活発に行う」と学びの転換を促している。

今回の改訂によって、「総合的な学習」が設けられ、様々な学習の要求に応える時間的な可能性は少なからず出てきた。こうした中で、生徒の自主的な様々な学びが行われるであろうが、その1つとして手話を学習したいといった児童・生徒も出てくるであろう。かつて、私は、選択学習の中で手話を取り上げたことがあったが、手話を通して生徒が聴覚障害者だけでなく、他の障害者へと意識が広まっていったり、手話の学習が進路に結びつき、手話のできる看護婦を目指すなど手話が様々な学習効果をもたらした経験をもつ。

しかし、実践の中で手話学習の教材や指導法に関する資料等が少ないことに気づいた。そこで、手話学習ソフトの開発を通して、その成果と課題を検討しようとした。

2. 学習ソフトの開発

(1) 開発の目的

この手話学習ソフトは、大きく2つの目的がある。1つは、教師や手話講師などの手話を生徒に直接教えることが可能な学校に対し、教師や手話講師中心の一斉授業を補い、個別の学習ができるように支援することである。もう一つは、教える教師や手話講師がいない学校でも、この手話学習ソフトを利用することで、自己紹介やあいさつなど手話講習会等で行われている初心者用レベルの会話を習得できるように支援することである。

(2) 開発の手順

開発は次のような流れで行った。

(手話学習ソフトの操作性等の検討と開発) → (授業実践と手話学習ソフトの有効性の検討)

①手話学習ソフトの操作性等の検討

まず指文字の学習ソフトの操作性や画面構成、さらに学習意欲等に関する調査を行った。質問紙の結果では、ほぼ全員が操作性に問題はないと解答している。ボタンの位置や表示の内容、次の学習場面への移動など小学生でも十分使いこなせるものと考えてよいと考える。次に画面構成であるが、自分から見た方向、相手から見た方向と2種類の画面を提示した。多くの市販の本では、自分から見た場合が多いのであるが、読みとりの段階では相手から見た画面が必要と考えたからである。児童の感想からも見やすいという評価を得た。

学習ソフトの実用性であるが、今回は手話講師の指文字の授業を受けての復習ということで利用した。指文字を覚えるには1時間の授業では当然無理で何度も繰り返す必要があるのだが、そうした面では学習ソフトは有効であろう。次に学習ソフトと学習意欲との関係であるが、質問紙の結果によるとほとんど全員がもう一度このソフトで指文字を学習したい、さらに他の手話も学習ソフトで学習したいと答えている。その理由としてはパソコン学習の特徴であるドリル的な要素や

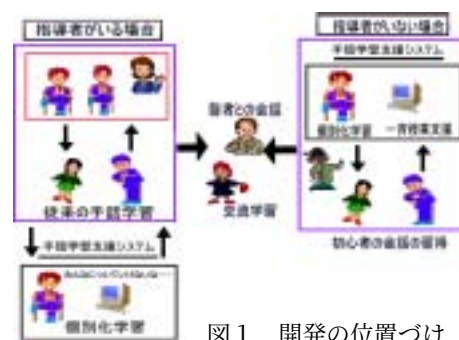


図1 開発の位置づけ

自己のペースで学習できることなどが考えられる。

②授業実践と手話学習ソフトの有効性の検討

学習ソフトを作成し、手話講師対象の生徒と学習学習ソフト対象の生徒を比較して手話学習ソフトの有効性を検討した。

調査の結果、学習意欲や手話表現の習得率の面で両者の差は見られなかった。このことから、このソフトの目的である手話を教える教師や手話講師がいない学校でも、この手話学習ソフトを利用することで、自己紹介やあいさつなど手話講習会等で行われている初心者用レベルの会話を習得できるようになることは可能であると考ええる。

(3) 学習ソフトの内容

手話文は1時間の授業を考慮して10文程度とし、総数はCD-ROMに収める関係上120文にした。手話単語に関しては1000語程度とした。日常生活で利用する単語は約5000語といわれおり、その点から見ると単語数としては少ない。しかし、本ソフトの目的が初步の会話を習得するという点からみると十分な量ではないかと考える。

手話習得の理論としては、Dulay&Burtの創造的構築仮説及びrashenの5つの仮説ををもとにモデルを作った。創造的構築仮説では、子どもは言語規則を組織化するメカニズムが先天的に備わっていると考え、それによって子どもが自らが積極的に言語の規則を作り上げるとしている。

手話も同じように手話を学習する中で、手話独自の文法を構築していくのではないかと考える。そのために、手話の習得の最初の段階は、まず理解可能な文を習得することであろう。次に理解可能な文に単語を入れ替えるなどしてInput量を増やすことで多くのバリエーションの習得が可能になると考える。そこで、本ソフトでは、児童・生徒にとって身近で自然なコミュニケーションがとれる内容などを考慮し、類語等も多く取り入れた。操作性に関しては、スローモードを取り入れるなどの工夫を行った。

(4) 学習ソフトを利用した指導法

本ソフトは、1時間の授業を前提として作成している。そこで、50分授業では導入5分、パソコン学習25分、会話練習10分、評価5分という形が考えられる。

教師の指導としては会話練習時に、楽しく会話ができればよい雰囲気作りを行うことが大切であろう。Krashen(1993)は、「第二言語習得」の中で情意フィルター仮説を唱え、学習者の不安感が少なく、防衛的態度がないような学習環境が情意フィルターを低下させると述べているが、教師はこうした学習環境づくりの支援を行うことが、指導法として重要であると考えられる。また、市田(1998)は、「手話学研究」の中で、情意フィルターを低下させるために学習者を前に出して「練習」させることをしない指導がよいと述べているが、私も同じ立場である。人前で行うのは発表であって、会話とは自然な状態でコミュニケーションを行うことであると考えられるからである。

3. 成果と課題

学習ソフトの開発によって、手話講師のいない学校での取り組みが始まったり、手話講師の授業を補うなどの活用が行われるようになってきた。さらに、実践の中で、手話を言語として扱うとき、その言語の素晴らしさから新たな学習が生まれてくるのではないかと考えるようになった。それは表現力や相手に伝える力を育てるための教材としてである。こうした実践例はまだ少ない。

今後は手話学習ソフトで、そうした新しい授業づくりにも挑戦していきたいと考える。

<参考文献等>

- Dulay,H,Burt,M,Krashen.S 著 牧野高吉訳 1993 第2言語の習得 鷹書房弓プレス
Lave,J. & Wenger,E.(佐伯胖訳) 1993 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加論 産業図書
市田 泰弘・木村 晴美 1998 手話教育におけるナチュラル・アプローチ 手話学研究
文部省 1999 学習指導要領 大蔵省印刷局



図2 手話ソフトの画面